

バンククス夫妻著

河村貞枝訳

『ヴィクトリア時代の

女性たち—フェミニズムと

家族計画—』

『ヴィクトリア時代の女性たち』という本訳書の表題は、一見、史家A・ブリッグズの代表的な著作の一つである『ヴィクトリア時代の人びと』（一九五四年）を想起させる。だが、バンククス夫妻の手になる本書の内容は、実は、本訳書のこの表題が連想させるものとは著しく異なっており、まさにもとの表題（本訳書では副題となっている）がいうように、「ヴィクトリア時代のイギリスにおけるフェミニズムと家族計画」の相互関係を問題としている。加えて、一読すれば明らかなことなのだが、本書が、夫バンククスによってその前に書かれた『繁栄と親子関係』（一九五四年）という人口

社会学的歴史研究の完全な延長線上にあることも疑いをいれない。それゆえ、わたしの感じでは、本書は、女性史の研究書という前に、やはり人口社会学的な研究といわなければならないと思う。だが、本書の第二章から第五章にかけて、また第八章において展開される叙述は、家族計画の進展という視角から、フェミニズムの史的な一特質を鮮かに照射しており、その意味で本書は、訳者解説もいうように、たしかに女性史の研究としても読者の期待に沿うものとはなっている。いずれにしても、本書は、人口社会学を手がけた夫バンククスとフェミニズムに強い関心を持つ妻バンククスの関心が交差するところに生まれたもので、よくできた共同作品ということができる。

イギリスにおける人口統計学の成果に従うなら、経済最先進国のこの国では、一八七〇年代から子供の数を制限する傾向が、社会的に大量現象として認められ、家族計画の実践が、中流階級全体にひろがり、以後しだいにより下の労働者階級へと及んでいったとされている。ところが、この産児

制限の社会的傾向が明確化した一八七〇～一九一四年の時期は、同時に、中流階級を中心にフェミニズムの運動が活発に展開された時でもあり、そのため従来、この二つの社会現象の間には相互に密接な関係があり、産児制限の普及はフェミニズムの一成果である、としばしば見なされがちであった。だが、本書の著者によるならば、この従来まま抱かれてきた漠然たる常識は、まったくの謬見なのであって、この二つの社会現象の間には、本来、直接的な因果関係は何ら存在しなかった。なるほど一八九〇年代になると、子供の数を減らすことが女性の解放につながることを明白に自覚したフェミニストが登場してくるが、この現象は、今や時の趨勢として確定した家族制限の傾向にフェミニストたちがや々と気がつくようになったからなのであった。

というわけで、本書の主要な課題は、一八七〇年代にいたる時期について、家族制限の傾向を生み出した史的要因とフェミニズムの進展との相互孤立性を論証する、ということに置かれる。だが、すでに夫バン

クスは、前者の、家族制限の傾向を生み出す史的要因に関して、先に挙げた『繁栄と親子関係』でウィクトリア時代の繁栄にもとづく中流階級の生活水準の著しい向上にその要因を見出ししており、それゆえこの点についてはその結論をそのまま踏襲して、かくして本書では、男女間の地位平等をめざすフェミニズムの運動がこの経済的な要因と無縁であったことの論証に八割方の精力が投入される次第となる。その方法は、結論的にいうならば、一八七〇年代にいたるまでのフェミニズムの運動が、その動機として家族制限ないしマルサス主義の契機を含んでいなかったことを、膨大な記述史料の整理を通じて明らかにしようとするもので、その論証過程は必ずしも完全とはいえないが、一応の成功は収めている、ということができる。

介
本書の出版後、一九七〇年代の、より民衆の生活に密着した社会史研究の動向は、一八七〇年代前においても、中流階級の間で、産児制限についての実際のな知識と実践意欲がかなり高かったことを明らかにし

てきている。だが、ウィクトリア時代におけるフェミニズムの定義を拡大するのならとにかく、それをバンクス夫妻がしたように、M・ウルストンクラフトからJ・S・ミルにいたる女権拡張論とウィクトリア中期からの男女間の地位の平等を確立する運動と理解するかぎり、夫妻の論証は今なお覆されたとはいえないと思う。その意味で本書は、一九世紀イギリスの家族計画史に関する基本文献たるの資格を、いまだ失ってはいないのである。

(四六判 二二三頁 一九八〇年一月
創文社歴史学叢書 一八〇〇B)
(村岡健次 和歌山大学教授)

編集後記

本号が御手元に届く頃には、祇園祭が始まり、うっとうしい梅雨もまもなく明けて……と書きたかったのですが、残念ながら遅れをとり戻すことができず、猛暑の候になりそうです。心より御詫び申しあげます。六三巻四号を御届けします。本号では日本史・東洋史・西洋史の新進・中堅から三

本の論文をいただきました。いずれも力作ばかりです。また石田善人氏からは幸徳秋水の貴重な資料の紹介を、永田諒一氏からはドイツ・フマニスムスに関する研究動向をいただきました。十分に御吟味下さい。

(S)

一九八〇年六月二五日印刷 一九八〇年七月一日発行 定価九〇〇円	史 林 (第六三巻第四号)
発行人 京都市左京区吉田本町 京都大学文学部	史学研究会
理事長 島田 虔次 振替京都五一五五番	
印刷所 京都市下京区七条御所ノ内中町五〇 中村印刷株式会社	